

五臓の君主は何か？

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

5月の東京中医研の例会で仙頭先生が自著『標準中医学』に基づく論を展開された。その際、他の四臓の上に心を配置する意見を述べられ、私はそれに疑問を呈した。もちろん周知のように『素問』靈蘭秘典論篇第八に「心は君主の官なり、神明焉に出ずる」とある。そこで古典の五行論における君主像の変遷を探るのが本稿の目的である。林克教授が神農祭で行った講演記録⁽¹⁾などの文献を参照しながら考えを述べていくことにする。

上記した『素問』の条文以外にも、『黄帝内経』には『靈枢』邪客篇に「心は五臓六腑の大主にして、精神の舍る所」とあるように、心を臓腑の君主と見る見方は確かにある。一方に『黄帝内経』の他の条文には脾胃特に胃を重視する説も見られる。後世の『脾胃論』（李東垣、1249年）に明確にされたように脾胃を主と見なす立場、『景岳全書』（張介賓、1624年）のように腎を重視する立場というように、歴史的にも五臓に関しては種々の論説が展開されてきている。

臓腑の五行配当は『黄帝内経』においてすら多少の混乱が見られ、それが臓腑に次いで重視される筋肉筋骨などの五体では更に混乱が広がる⁽²⁾。

そもそも歴史的には種々の五行配当の説が見られる。その代表をあげると、『管子』水地篇には「木・脾、火・肝、土・心、金・腎、水・肺」とあり、『太平御覧』には「木・肺、火・肝、土・心、金・脾、水・腎」の説が見られる⁽³⁾。しかしより注目すべきは古文尚書説（以下、古文説と略記）と今文尚書説（以下、今文説と略記）であろう。古文説は『礼記』月令にも同様の記事が見られ、「木・脾、火・肺、土・心、金・肝、水・腎」の配当である。この古文説の五臓の配当は背面から見た人（獸）体解剖に従っている⁽⁴⁾。頭方（に位置する肺）は南（＝火）、右方（に位置する肝）は西（＝金）、左方（に位置する脾）は東（＝木）、腹方（に位置する腎）は北（＝水）である。古文説の成立は戦国末と考えられている。ちなみに古代における方位は、『周易』の「君子南面」に従い、上（前）方は南、下（後）方は北となっているが、東西は右を東、左を西とする説と、逆に取る説が混在しており、その都度考える必要がある。古文説は後者ということになる。

現在我々が用いている周知の五行配当「木・肝、火・心、土・脾、金・肺、水・腎」は今文説の流れである。そしてこの説は、四時に対する陰陽的解釈、および人（獸）体解剖の所見に対する陰陽的解釈を、その陰陽の共通項により結合することで構成されている。つまり陰陽説と結合した天人相関説を骨組みとして構成されているといえる⁽⁵⁾。そしてこの説は『扁鵲倉公伝』の倉公＝淳于意の師匠の陽慶が導入したものであると考えられ、成立はほぼ漢初と推定されている⁽⁶⁾。

古今文尚書両説の最も特記すべき違いは、中華思想の根幹であり重要視されるべき中央・土に配当する五臓が、古文説では心であるのに対し、今文説では脾胃であることである。つまり古文説においては君主である心が中央に位置し、今文説では心を南方に配し、中央に脾胃を配し重視したのである。つまり現伝の今文説で君主は脾胃ということになる。

君主が中央から外れ、南方＝火に配当することに問題が生じなかったのは、前漢の終わり頃に各王朝の五行徳が決められ、漢が火徳の国とされたからである⁽⁷⁾。この歴史的変遷は『説文解字』(後漢・許慎著、部首別の最初の字書、略して『説文』)の「心は人心にして、土藏、身の中に在る。象形。博士説：以て火藏と為す」にも、心の配当が土から火へ変化したことが見てとれる。

以上の点から考えられることは、上記したような『素問』靈蘭秘典論篇や『靈樞』邪客篇の「心を臟腑の君主と見る」見方は古文説に則る時期の説と見なせることである。たとえば『黄帝内経』より古い時代の諸子百家を見ても、『荀子』解蔽篇に「心は形の君なり、神明の主なり」や、『淮南子』卷一原道訓に「夫れ心は五藏の主なり」など用例は多い。

そして現代に繋がる中国医学の一般的な配当法である今文説においては、脾胃(特に胃)を重視する論が展開されることになる。今文説の最も早い用例は、淳于意と余り離れていない時期に成立した『淮南子』隄形訓に既に見られる。林先生は(脾)胃が重視されるようになった今文説の論拠として次の事実を指摘している⁽⁸⁾。

『史記』倉公伝に「大倉公なる者は、齊の大倉の長、臨菑の人なり。性は淳于氏、名は意」とある。つまり淳于意は大倉＝穀物倉庫の長であったために「大倉公」と呼ばれたのであり、彼はその地位を自ら重要視して為政の長に擬え、君主の居所であるべき中央に脾胃を配したとする。それは『靈樞』脹論の「胃は大倉なり」が参考になるとし、淳于意は後に罪を得るが、この五行説を用いた黄帝に対する不敬が原因とも考えられている。そして医学においても今文五行説が大いに普及するのは、帝王である心を南に配しても不敬に当たらない漢火徳説の出現以降である、と。

ところで漢火徳説であるが、そもそも五徳終始説というのは、各王朝の帝徳の推移の論であり、五行に則る王朝の命運に他ならない。その思想は齊の鄒衍すうえんに始まって、秦漢に至っていよいよ牢固となり、その構想に二通り有り、一は五行相克により、一は五行相生による。従来は鄒衍一派の相勝(相克)説がもっぱら行われ、前漢末に劉向りゅうきやう・劉歆りゅうきんにより相生説が創唱された。従来の相勝説では漢王朝は土説と水説があったが、劉向父子により初めて漢火徳説の流行を見たのである⁽⁹⁾。

最後に少し特殊な形の心の重視を見てみよう。それは『素問』玉機眞藏論篇第十九に見られる風寒の侵入順に関する条文⁽¹⁰⁾である。本篇の前段には通常の相生順の記述が二ヶ所に見られる⁽¹¹⁾にもかかわらず、この風寒侵入順は毫毛・皮膚 肺 肝 脾 腎 心となっている。これは相克順であるといってしまうとそれまでだが、ここに君主である心は多くの衛兵に守られた宮城の最奥に居住しており、最後に攻められる場所にいるという認識も併せ持っていたとも考え⁽¹²⁾れば、心を君主とみての並び順とも言えよう。

【文献及び注】

1, 林克：五臓と陰陽五行説、斯文102:109-121, 1994

2, 林克：五體考、大東文化大学漢学会36:98-125, 1997

3、『太平御覧』卷三七六に「説文曰」として引用されている。「肝火藏也」とあり、以下「肺水藏」「脾金藏」「腎水藏」と記されている。心に関しては冒頭に記述があるものの、五行配当に関しては記述が無いが「心土藏」と考えて問題ない。肺と腎が共に水藏に配当されており、「肺木、腎水」か「腎木、肺水」のどちらかが妥当すると見なせる。林

克は、【五蔵の五行配当について――五行説研究 その――、中国思想史研究6:23-67, 1984】において、表記の説が正しいと論じている。

4, 文献1と同じ。

5, 注3中の林克論文と同じ。

6, 林克:『黄帝内経』における陰陽説から陰陽五行説への変容、大東文化大学漢学会30:59-82, 1991

7, 文献6と同じ。

8, 文献6と同じ。

9, 小林信明:中国上代陰陽五行思想の研究、pp.129-174、大日本雄弁会講談社、昭和26年

10, 今風寒客於人, 使人毫毛畢直, 皮膚閉而爲熱, 當是之時, 可汗而發也, ...病入舍於肺, ...肺即傳而行之肝, ...肝傳之脾, ...脾傳之腎, ...腎傳之心, ...滿十日, 法當死。

11, (1) 春脉太過與不及, 其病皆何如, ...夏脉如鉤, 何如而鉤, 岐伯曰, 夏脉者心也, 南方火也, 萬物之所以盛長也, ...夏脉太過與不及, 其病皆何如, ...秋脉如浮, 何如而浮, ...秋脉太過與不及, 其病皆何如, ...冬脉如營, 何如而營, ...冬脉太過與不及, 其病皆何如。

(2) 五蔵受氣於其所生, 傳之於其所勝, 氣舍於其所生, 死於其所不勝, ...肝受氣於心, 傳之於脾, 氣舍於腎, 至肺而死, 心受氣於脾, 傳之於肺, 氣舍於肝, 至腎而死, 脾受氣於肺, 傳之於腎, 氣舍於心, 至肝而死, 肺受氣於腎, 傳之於肝, 氣舍於脾, 至心而死, 腎受氣於肝, 傳之於心, 氣舍於肺, 至脾而死, 此皆逆死也。

12, 林克:『素問』『靈樞』の五主について、大東文化大学紀要・人文科学 35:145-164, 1997